

# 海外経済 ～ユーロ圏経済はドイツ主導で今年も好調～

経済調査部 柵山 順子

## 景気好調を維持するユーロ圏

2006年のユーロ圏経済成長率は、前年比+2.8%と、2000年以来の高成長を遂げた。ITバブル崩壊後、「欧州の病人」と言われるほどの低成長が続いていたドイツ経済が拡大したことが昨年のユーロ圏経済好調の一番の要因である。そこで、以下ではドイツがなぜ好転したのかを見ていく。

## ITバブル崩壊後のドイツ経済停滞

ITバブル崩壊後、ドイツ経済は長く停滞期間が続いた。ITバブル前後の実質GDP成長率を見ると、95～99年の平均が前年比+1.6%であったのに対し、01～05年は同+0.6%に留まった。

こうしたドイツ経済停滞の背景の一つには、ドイツの主力産業が建設機械などの資本財生産であり、海外需要の影響を受けやすいということが挙げられる。ドイツが停滞し始めた2001年は世界的に景況感が悪化した時期であり、そうした景況感の悪化がドイツの資本財輸出を鈍化させたことが停滞のきっかけと言える。

また、ユーロ発足時にドイツマルクが割高な水準でユーロに固定された。このため、ユーロ導入後に国際的な価格競争力を失ったことも、景気停滞につながる大きな課題であったと考えられる。

さらに、価格競争力が低下したために、ドイツ企業が設備投資を抑制し、国内の資本財需要が低下したこともドイツ経済の停滞を長引かせた。

以上のような、国内外の資本財需要の鈍化、国際競争力の低下がドイツ経済の停滞を招いた。

## リストラも一服したドイツ経済

では、停滞していたドイツ経済が現在のように好転したのはなぜなのだろうか。

その答えとして、設備や人員の調整が一段落し、価格競争力が高まったことが挙げられる。

まず設備投資についてみると、ITバブル崩壊後、設備投資は前年比でマイナスの伸びが続いていたが、06年はドイツ統合以来最も高い伸びになった。設備稼働率をみると、05年以降は上昇基調に転じており、企業の余剰設備に対する調整は大きく進展したと考えられる。

また人員についても、製造業の雇用者数は、この5年間で100万人程度削減されていたが、足元では5年半振りに前年差プラスとなった。このように長く続いた設備、人員のリストラは足元で一服感が出ている。

この間の海外需要動向を見てみると、ITバブル崩壊を機に鈍化していた世界経済は、2003年頃から回復感を強めた。当初は、原油高やユーロ高により輸出は伸び悩んだが、2005年後半頃からは、原油高やユーロ高にもかかわらず輸出は拡大した。さらに、昨年後半以降は、米国景気が鈍化する中でも、輸出は好調さを保っている。

つまり、ユーロ導入により価格競争力を失ったことによる設備、人員の調整に目処が付き始め、価格競争力を取り戻したことが、今回の景気拡大を導いたということである。

年明け以降も、新興国の建設ラッシュや、これまで抑制されてきた国内の資本投資の再拡大により、ドイツ経済は好調に推移している。年後半には米国経済の再加速が見込まれることから、価格競争力の高まったドイツ経済は今年も国内外の強い資本財需要に支えられ、企業部門主導での景気拡大が続くだろう。こうしたドイツ経済の好調は、ユーロ域内にも波及している。フランスやイタリアといったその他主要国も堅調な推移が続いており、ユーロ圏経済はドイツを牽引役に今年も潜在成長率を越える成長となりそうだ。

さくやま じゅんこ（副主任エコノミスト）